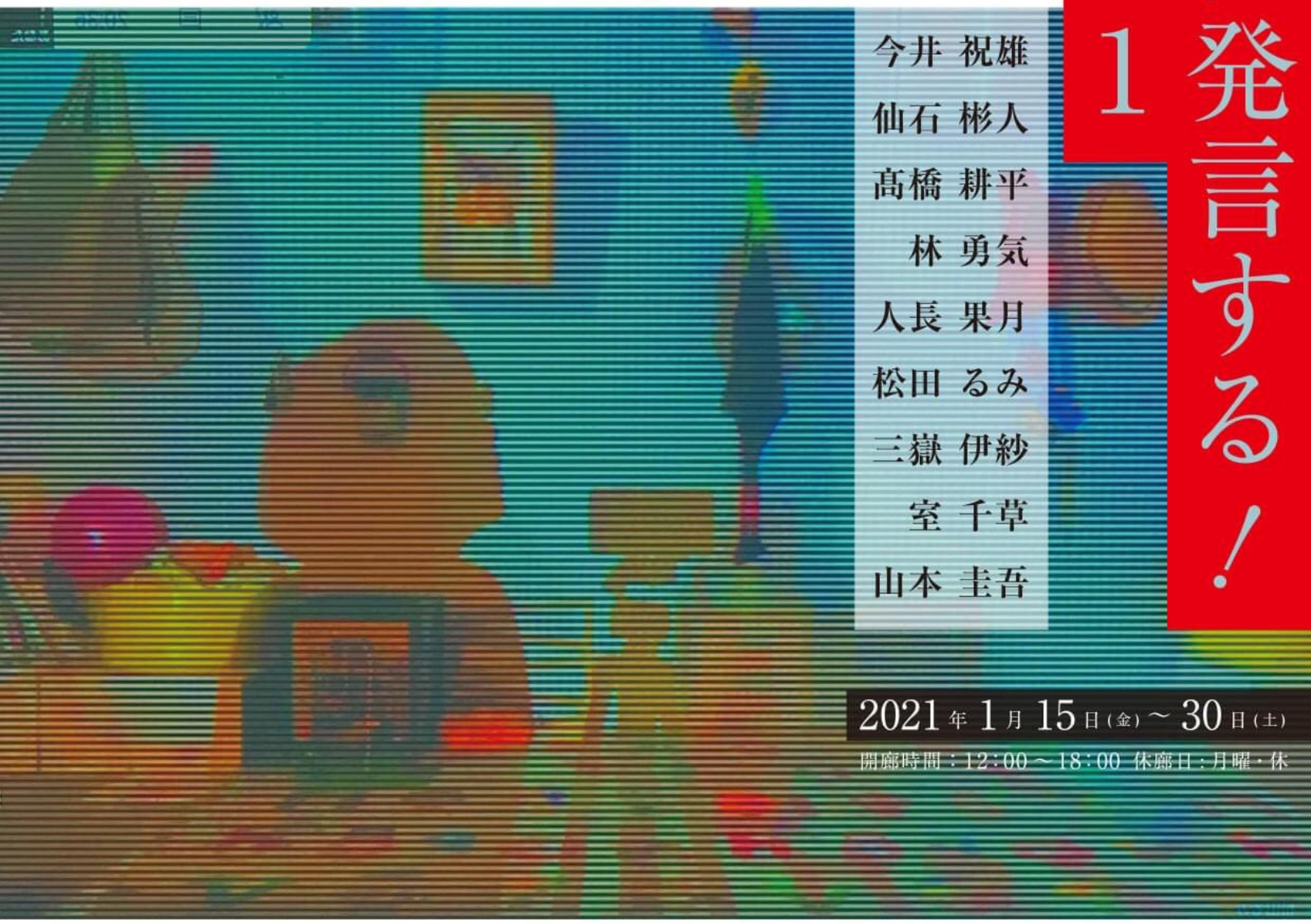
配信時代の思考と試行

映像は発言する！2021

今、私たちの生活や習慣、思考やコミュニケーションは大きく問い直されている。表現全般の展示や発表のカタチも刷新を迫られ、そしてこの状況下、映像メディア（オンライン）が私たちの日常生活にさらに大きく喰い込んでいる。

今井 祝雄
仙石 彬人
髙橋 耕平
林 勇気
人長 果月
松田 るみ
三嶽 伊紗
室 千草
山本 圭吾



2021年1月15日（金）～30日（土）

開廊時間：12:00～18:00 休廊日：月曜・休

松田るみ　制作過程より

「映像配信」を一つの実験的メディアとして捉えた「配信による配信のための映像」とは？

galerie 16

配信時代の思考と試行

映像は発言する！2021

今井 祝雄
仙石 彬人
髙橋 耕平
林 勇気
人長 果月
松田 るみ
三嶽 伊紗
室 千草
山本 圭吾

2021年1月15日(金)～30日(土)
開廊時間：12:00～18:00　休廊日：月曜・休

2020 年、予期せぬ新型コロナウィルスに強襲され、私たちの生活や習慣、思考やコミュニケーションは大きく問い直されています。表現全般の展示や発表のカタチも刷新を迫られ、そしてこの状況下、映像メディア（オンライン）が私たちの日常生活にさらに大きく喰い込んできました。そこで長年、映像に意識的に取り組んできた美術作家に、「映像配信」を一つの実験的メディアとして捉えた「配信による配信のための映像作品」を依頼し、『映像は発言する！2021」という展覧会として、ギャラリー 16 内にその映像作品を展示するという試みを企画しました。

この企ては、1969 年、まさにギャラリー 16 にて開催された「映像は発言する！」という展覧会にリンクしています。この展覧会は映像制作を専門としない美術家たちが、当時新しいメディアだった映像の拡張的可能性に挑む野心的な試みでした。この企画の中心的作家であった故松本正司氏は「私たちの美術思考を映像というメディアによって表現する美術展」と説明しています。https://shinobusakagami.com/images-history/70 年代映像史 /1414/

この 1969 年の「映像は発言する！」に呼応し、2021 年 1 月、まさに美術家にとって新しいメディアに違いない映像配信の表現的可能性を発掘したいと思っています。美術作家に配信という方法でご参加いただき、発想してもらうことによって、現在の配信映像に関わる思考と試行を確かめながら、改めて展示における対面と非対面の伝達形式、作者と観客の関係性、そして最終的に、この時代であるがゆえの美術と映像の新たな関係を共に発見したいと考えています。

林 ケイタ＋ギャラリー 16（企画）

YouTube ライブ配信

YouTube 配信ライブ A　1 月 17 日(日)
出品作家によるオンライン・リアルタイム映像配信

YouTube 配信ライブ B　1 月 29 日(金)
仙石彬人 × 今村達紀、室千草、その他
作家によるパフォーマンス配信
※配信テクニカル：梅岡唯歩

ライブ詳細に関しては URL にて情報掲載
https://www.art16.net/
「ギャラリー 16」と検索ください

情況により展覧会期に変更が生じる場合がありますのでＨＰ等でご確認の上ご来廊下さい。

林 ケイタ　KEITA HAYASHI

1992 年より、映像と空間の関係をテーマとしたインスタレーションの制作を開始。映像メディアの特性を再考しながら、「見る」という感覚や知覚を問い直すことに関心を持つ。2002 年以降、作品制作と並行しながら、国内外にてアート・プロジェクトを様々な分野とコラボレーションで企画、開催。映像表現における新たなネットワーク構築を目指している。2015 年から映像専門の Lumen gallary に関わる。

©1969 ギャラリー16

©1969 ギャラリー16

galerie 16
〒605-0021 京都市東山区三条通
白川橋上ル石泉院町 394, 3F
TEL. 075-751-9238
e-mail info@art16.net
HP www.art16.net

地下鉄東西線：［東山］1 番出口北へ徒歩 1 分／市バス：［東山三条］より東へ徒歩 2 分
Subway: To-zai Line [Higashiyama Stn.] Exit①／ Buses: [Higashiyama Sanjo]
3F Sekisen-in-cho, Sanjo, Shirakawabashi-Agaru, Higashiyama-ku, Kyoto 605-0021 Japan

仙石 彬人　AKITO SENGOKU

2004 年より「時間に絵を描く」をテーマに、リキッドライティングの技法を用いたライヴ・ヴィジュアル・パフォーマンス "TIME PAINTING" をはじめる。楽器を演奏するかのように 3 台の OHP を同時に操りながら紡がれる光の絵は、絶えず変化し続け 2 度と同じにはならないその場限りの物語を描く。LIVE という表現方法にこだわり、あらゆるジャンルのミュージシャンやダンサー、アーティストとのコラボレートワークを活動の場としている。2017 年 01 月には国際交流基金の助成を受け、約一ヶ月におよぶフランスツアーを実施。フランスのデュオ Rhizottome、箏奏者の今西玲子との公演「庭師の夢」を 4 都市にて上演。2019 年 12 月、インド オディシャ州で行われた" ODISHA BIENNALE 2019" に参加。

髙橋 耕平　KOHEI TAKAHASHI

フィールドワークやインタビュー、資料の解釈行為を通して他者や史実との対話を巡る作品を制作する。主に映像表現を用いるが、ドキュメンタリー、行為の記録、スライドショー等、作品ごとに手法が異なり、近年は自らの声・体を映像に持ち込み、自らを再生機 / メディウムとして駆動させている。近年の主な展覧会として「文化庁メディア芸術祭京都 Ghost」ロームシアター京都 (2018 年)、「切断してみる。―二人の耕平」豊田市美術館 (2017 年)、個展「髙橋耕平 – 街の仮縫い、個と歩み」兵庫県立美術館 (2016 年)、などがある。

林 勇気　YUKI HAYASHI

映像作家。京都市生まれ、兵庫県在住。1997 年より映像作品の制作を始める。自身で撮影した膨大な量の写真をコンピュータに取り込み、切り抜き重ね合わせることで映像を作る。その制作のプロセスと映像イメージは、デジタルメディアやインターネットを介しておこなわれる現代的なコミュニケーションや記録のあり方を想起させる。主な個展に、2011 年「あること being/something」（兵庫県立美術館）、2016 年「電源を切ると何もみえなくなる事」（京都芸術センター）、2018 年「遠くを見る方法と平行する時間の流れ」(FRAG Studio、大阪)、2019 年「ANIMATION」(奈良市美術館) など。現在は大阪の SUPER STUDIO KITAKAGAYA(SSK) を拠点に活動をしている。

人長 果月　KAZUKI HITOOSA

2000 年よりインタラクティブ映像の制作を始める。マルチメディアを用いた作品制作を通して、知られざる感性を探求している。既成概念を超える視点で生命や身体を考察することを目指す。
2015 年　琳派 400 年記念新鋭選抜展～琳派の伝統から、RIMPA の創造へ～最優秀賞受賞、2015 年　京都市芸術新人賞受賞、2015 年　神戸ビエンナーレ 2015 入賞作家招待作品展（神戸 / 東遊園地）、2016 年　消滅の夢展（メキシコ / ベラクルス州立大学美術造形研究所ギャラリーフェルナンド）、2017 年　再生の庭（上海 / 藝倉美術館）、2018 年　Art Meets Winter（京都 / 京都新聞社ビル、タイム堂）、2020 年　KYOTO STEAM－世界文化交流祭－アート × サイエンス IN 京都市動物園 アートで感じる？チンパンジーの気持ち（京都市動物園）

今井 祝雄　NORIO IMAI

1946 年、大阪市生まれ。もと具体美術協会会員。1970 年代から写真やビデオ、サウンドによる作品を制作。1979 年から毎日の自写像「デイリーポートレイト」を継続。
1969：映像は発言する！　ギャラリー 16/ 京都
1981：今井祝雄ビデオパフォーマンス、ビデオギャラリー SCAN/ 東京
1983：第 12 回モントリオール国際ニューシネマ・フェスティバル、カナダ
2007：ラディカル・コミュニケーション：日本のビデオアート 1968-1988」ゲティセンター / ロサンジェルス
2009：ヴァイタル・シグナル―日米初期ビデオアート、ジャパンソサエティ
2019：今井祝雄 - 行為する映像、アートコートギャラリー / 大阪

松田 るみ　RUMI MATSUDA

時空間の中で変容する" 私" と世界との関係性をテーマに、揺れ動く＜今・ここ＞を体感する、映像を使用した、パフォーマ ンスやインスタレーションを制作。また日常と生活を普遍的に更新することを目標に「マッダホーム」という家で活動。
2019 年 あいちトリエンナーレ地域展開事業『Windshieid Time- わたしのフロントガラスから』現代美術 in 豊田 (豊田市駅 / 愛知)
2019 年 会館 30 周年記念特別展「美術館の七燈」(広島市現代美術館 / 広島)
2019 年 アメニモマケズ (Bank ART Station/ 横浜)
2018 年 始末をかく (BUoY/ 東京)

三嶽 伊紗　ISA MITAKE

1980 年代より様々な素材を用いて発表。〈カタチ〉から離れたいと〈モノ〉の輪郭を曖昧にする制作をつづける。2007 年より映像作品も発表。擦りためた像を何層も重ね、眠りの中の夢のように時間軸のない絵を探す。

2014 年「三嶽伊紗のしごと _ みているもののむこう」徳島県立近代美術館
2016 年「縄文と現代 [白い、白い遠望]」京都造形芸術大学芸術館
2019 年「みえるもののむこう」神奈川県立近代美術館 葉山
2020 年「影を刺す光―三嶽伊紗＋守屋友樹」京都芸術センター

室 千草　CHIGUSA MURO

1973 年生まれ。1996 年大阪芸術大学卒業。1999 年頃から映像のインスタレーション作品を様々な方法で制作し、国内外で発表。映像の静的要素の組み込みや、映画手法の再構築などを通して、現実と空想の境界を抽象化し独自の時間の流れを創出する試みをしている。2016 年からは、映像と展示空間と音響の領域をより密接に交差させることにより、インスタレーションでしか作れない虚構の景色と時間を作り、鑑賞者の想像力や感覚力に働きかける世界を創出する試みをしている。
2007 年「Behind the eyes」IF Museum（ポズナン、ポーランド）
2010 年「Mediators」ワルシャワ国立美術館（ワルシャワ、ポーランド）
2016 年「何番目かの空白」LumenGallery（京都）
2019 年「Shadow Collection」光兎舎 Gallery（京都）

山本 圭吾　KEIGO YAMAMOTO

1936 年福井県足羽郡（現・福井市）生まれ，福井商業高校の視聴覚教室担当になった 1968 年頃からヴィデオを使う作品を制作し始める。同じ時期には，火や煙を使うパフォーマンスを海岸で行なっている。1971 年からは観客が作品に参加をするヴィデオ・インスタレーションをギャラリー 16 などで発表する。「第 11 回日本国際美術展」（東京都美術館）や「ジャパン・アート・フェスティバル '74」（モントリオール現代美術館），「第 13 回サンパウロ・ビエンナーレ」(1975) など大きな規模の国際展でもヴィデオ・アートの作品を早くから発表してきた。「通信と芸術の関係」というテーマにも早くから取り組んでいる。日中ネットワークアート」展（京都芸術センター，中華世紀壇 / 北京，2005）の企画及び作品展示をしている。